

法政大学学術機関リポジトリ

HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

病んだヘルメスと境界線上の都市 : 『充たされざる者達』の都市像について

著者	古川 淳一
出版者	法政大学教養部
雑誌名	法政大学教養部紀要. 外国語学・外国文学編
巻	108
ページ	187-212
発行年	1999-02
URL	http://hdl.handle.net/10114/3992

病んだヘルメスと境界線上の都市 ——『充たされざる者達』の都市像について

水銀＝メリクリウス＝ヘルメス。音楽の神はアポロンやムーサではなく、足迅きヘルメスである。⁽¹⁾

古川 淳一

はじめに

『充たされざる者達』⁽²⁾は、東欧の架空の都市を舞台にしている。この都市に到着した著名な現代音楽家ライダーを待ち受けるのは、この都市の音楽界の権力抗争である。都市住人達はこの都市が音楽の都になることを願っているが、近年この都市の音楽界を牛耳るクリストフの評判は下がりつつあり、ホテルの支配人のホフマンはミス・コリンズや伯爵夫人の協力を得て、有名であるが奇行で知られるブロッキーを担ぎ出し、クリストフに代わる新しい音楽の確立を画策している。

しかし、この中・上流階級の音楽論に名を借りた権力抗争は、マジャール人（ホテルのポーターを生業とする者が多い）に対する支配構造の上に展開される。しかし、この危うい二重構造は変化する気配はない。ホテルのポーターのグスタフが誇らしげに、旧市街の住民達はポーターになることが「地元の神話」だというのは、このような支配構造がずっと温存されていることの証拠である。そして、この支配構造はずっと続くだろう。ポーターたちの心の支えであるグスタフが死んだ後でも、自分達は「基準を落とすことはしない」と誓うからである。

このような複雑な権力抗争と支配構造の中に投げ込まれたライダーは、ゾフィー、ボリス、グスタフ、ホフマン、ステファン、ミス・コリンズ、ブロッキー、クリストフ、伯爵夫人らの都市住人達によって翻弄され、この都市を去っていく。

都市の中心部に無機的な近代的なビルが建ち、川によって中世の建物が多くみられる旧市街と新しい市街が区切られ、また古い壁で旧市街と新しい市街地が隔てられていたり、外国人達が滞在していたりするところからすると、この架空の東欧の都市は「昼の都市」、「夜の都市」が共存する近代的都市としての性格をもっているといえるだろう。

一部の都市住人はこの都市をシュツットガルト、アントワープというヨーロッパの地方都市と比較していることから、この都市はロンドンやパリのような大都市ではないということがわかる。この都市の旧市街（グスタフが孫と散歩をする様子がアダージオでゆったりと語られる）には、マジヤール人たちの集まるハンガリアン・カフェとよばれる大きなカフェがあることから、この架空の都市はブダペストを連想させるが、私たちが問題にするのは、ライダーという存在によって、この都市の新旧の対立関係の均衡が乱され、幻想的・悪夢的な都市が姿を現すという点である。

近代都市の都市住人は都市の重圧に苦しみ、柔らかい都市をつくり出し一時的に避難所をつくるが、都市住人達の夢想するこの不可視な柔らかい都市は、やがては廃墟化する。⁴³⁾しかし、この作品においては、都市の中心部に存在する壁によって、避難場所が確保されて、今後も存在し続けるのである。これは、『漂う世界の画家』⁴⁴⁾の廃墟の世界からの旅立ちとは大きく異なっている。柔らかい都市としての避難場所をつくるこの都市の壁は、語り手ライダーにとってどのような存在なのだろうか。

『充たされざる者達』の（アイリス・マードックとはまた異なった）魔術的なリアリズムで描かれている都市像とライダーという不可思議な音楽家を論じる手順として、まず第一章として、静かな都市を乱すライダーという存在を論じることにする。高名な現代音楽家である彼が隠さなければならないものとは何なのか。彼の秘密と何かを明らかにし、ライダーのリアリティーに迫ることにする。第二章として、架空の不可思議な都市の秘密のヴェールをはがすことにする。不機嫌な都市住人達が姿を現すことになるだろう。第三章として、病んだヘルメスであるライダーの越境的行為と、この都市に存在する壁の象徴性について論じる。ライダーと都市を論じる際に、この項目は大きな論点になるだろう。そして、まとめとして『充たされざる者達』の都市像とはどのようなものなのかを論じる。

第一章 ライダーという病人

(一) 境界線上の音楽家

ライダーは、この都市の人々によって翻弄される姿しかあらわさない。彼の演奏の腕前は、〈木曜の夕べ〉で演奏する機会を逃してしまっているので、ホテルの支配人のホフマンに案内された不思議な空間の練習場での通りいっぺんの演奏でしか知ることができない。

音楽家としての彼の技量は、むしろクリストフの私的な集まりである昼食会での会話でわかる。この都市の音楽愛好家たちの一人から「装飾した三和音は、前後の流れとは無関係に、それ自体、感情的な価値を内在しているのはほんとうですか」と問われ、

装飾した三和音には、それ自体のもつ感情的な特質などありません。実際、その感情の色合いは、前後の流れによってばかりか、音量によっても大きく変わりうるのです。それが私の個人的意見です。【上 二九七頁】

と答える。装飾した三和音自体に絶対的な価値があるのではなく、三和音の価値はその和音が置かれる前後関係に依存するという、テキストとしての三和音論ともいべき主張をする。ライダーに装飾された三和音の質問した当人は、わが意を得たかのように、「やっぱりそうか。ほくにはずっと分かっていたんだ」とつぶやく。なぜこのような質問がされたのであろうか。

クリストフは、この都市にチェロ奏者としてやってきて、その後この都市の音楽界の主流となった人物である。クリストフが音楽を普及させた功績は万人が認めているにせよ、彼の評価は著しく下がっている。彼には、現代音楽は「複雑きわまりないもの」になり、完全に理解の範囲を越えている。装飾された三和音の問題もクリストフ流の説明の影響が顕著である。難解な現代音楽は、フォン・ヴィンターシュタイン市長や、伯爵夫人、一般市民にも理解できないというクリストフに対して、ライダーは反感を感じ、精一杯の現代音楽の擁護論を展開し、一座の注目を浴びる。

ホテルの支配人の息子であるステファンは、両親に期待されていたが、ピアノの先生と相性が悪く両親に見放されてしまう。彼はもう二年近くも、演奏を

聞いてもらえていない。〈木曜の夕べ〉で演奏することになっているが、不安でしょうがないとライダーに胸中を告白する。ライダーは

きみはできるかぎり自分の演奏を楽しんで、ご両親に何と言われようと、それに満足と意義を見いだすといい【上 一〇八頁】

と忠告する。ライダーの言葉に勇気づけられ、ステファンは〈木曜の夕べ〉で演奏することになっている曲を聞いてほしいという。ライダーは、「ためらいとどこちなさの下にまぎれもなく独創的な発想と繊細な感情の表現」を感じ、ステファンの音楽に引き込まれる。

しかし、クリストフがつくりあげたこの都市の音楽受容の水準の低さに甘んじている人々は、〈木曜の夕べ〉に前座として演奏したステファンの演奏を、どう評価していいのかわからない。ライダーは彼の演奏を激賞するが、ホフマンやホフマン夫人は過去に自分の音楽観を否定した息子の真価を評価しようとしないのである。ステファンのあとに登場したブロッキーは、シュツットガルト管弦楽団を指揮し、出だしの新しい音で市民に衝撃を与える。ミュラーの曲の第二楽章に入ると、「かなり自由な形式を活用し、ますます未知の領域へと音楽を押し進め」ライダーを魅了する。しかし、ブロッキーも不摂生ために抑制が効かず、オーケストラのメンバーのみならず市民を混乱に陥れてしまう。

〈木曜の夕べ〉というまたとない機会に、ブロッキーはアル中のために集中力を欠き、演奏を抑制することができずに、ステファンは過去が災いして正当な評価を下されないのである。ブロッキーやステファンばかりでなく、この都市の住人達も古い音楽のしがらみにとらわれて、衝撃をうけながらも、いま自分達が聞いている新しい音楽を評価できないのである。ここで強調したいのは、ステファン、ブロッキーは聴衆に支持されなかったが、ライダーは新しい音楽を評価したことである。ステファンやブロッキーの音楽の真の理解者は、ライダー一人であったということなのである。新しいものに評価を下すものは、古いものと新しいものという二つの領域を自由に行き来できるヘルメス的な存在でしかありえない。ライダーはまさにこのような役にはぴったりの存在なのである。

(二) 音楽家の秘密

現代音楽家ライダーが語り手となっているこの小説には、二つの秘密がかくされている。そのうちの一つは結婚の秘密である。ライダーはゾフィーとの結婚を隠すために、ボリスの前では当初母の友人としてふるまっているが、人口湖にいったときに、父であることがボリスにわかってしまう。人口湖の住人は、ここは自殺者が多いとライダーとボリスの前で言う。ライダーは、

「(…) それにわたしはあなたがどう思おうと知ったことじゃない。あなたにどんな関係があるんです？あの子はわたしの息子だ。」【上 三二三頁】

と言って言葉を遮る。しかし、ライダーは父親として役不足である。この都市の住人たちに翻弄されて疲労している彼は、つかかとなって自分のプレゼントした古本を後生大事に持っているボリスを怒鳴りつけてしまう。ボリスはライダーの叱責に耐え、徐々に精神的に成長していく。たぶん、祖父の跡を継いで優秀なポーターになるのかもしれない。〈木曜の夕べ〉のあと、ゾフィーが愛想をつかしたので、ライダーと別れなければならなくなった時にボリスの見せた躊躇は、ライダーの父としての役割を最後まで問うているのだ。

結婚の秘密は、隠している本人によって明るみに出てしまうが、ライダーのもっと大きな秘密は、彼がユダヤ人だということである。ライダーは謎めかして言及しているが、ボリスと行った人口湖はフィオナ・ロバーツ、インゲ、キムおばさんらのユダヤ人が集団で住んでいるし、(ここにフィオナ・ロバーツが仲間はずれにされて苦しんでいる団地もある) また、ユダヤ人が訪れるミス・コリンズもたぶんユダヤ人であろう。控え目に、また謎めかして言及されているにもかかわらず、ホテルで突然イングランドとウェールズの境にあったおばの家の記憶に襲われたり(第一章)、ウースターシャーのフィオナ・ロバーツの家の記憶がよみがえったり(第一二章)、カーヴィンスキー・ギャラリーの庭にある廃車を見て、ウースターシャーの家にあった父の車だと思い込み、追憶にひたったり(第一八章)、ウースターシャー時代のクラークソ夫人の居間での出来事(第二五章)が読者に示される。ユダヤ人としての過去の記憶がライダーの脳裏に浮かび、ライダーが苦しむことによって、結婚の秘密同様、出生の秘密が暴露されるのである。

過去の記憶と現在の人間関係に苦しむライダーはゾフィーに、「根が深くて、

一見手もつけられない問題」に困っていると言う。それは、非常に微妙な人種問題である。ユダヤ人であるライダーがこの都市の被支配民族であるマジャーラ人の娘ゾフィーと結婚することによって（結婚は反対されたために秘密にせざるをえなかった）、二重のマイノリティーの運命を背負ったために、現代音楽の伝道と人種問題を解決せざるをえない使命を課せられるのである。ミス・ヒルデが、ライダーと危機に苦しんでいる市民相互支援グループとの会合を設定したのも、スタッフがポーターたちの待遇改善を求めるように〈木曜の夕べ〉でライダーにスピーチをしてほしいといったことも、このような運命を背負った人間ならば当然持ちかけられる難題なのである。ライダーは、自分がボリスのそばにいられないのは旅をしているからだと言明する。

わたしがこんな旅を続けなければならないのは、そう、いつめぐり合うか分からないからなんだ。つまりとても特別な、とても大事な旅、・・・わたしだけでなくすべての人、この全世界のすべての人にとっても、とてもとても大事な旅に。【上 三二六頁】

全世界のすべての人にとって大事な旅とは、無論現代音楽の伝道と人種問題解決の旅であろう。この都市にきた夜、ホテルの近所にある映画館で上演されていた「二〇〇一年宇宙の旅」(2001:A Space Odyssey)⁵⁾をもじれば、ライダーは現代版オデュッセウスとっていいも知れない。しかし、重要なのは、ユダヤ人の中でも仲間はずれになっている彼が、このような大役をかつているということだろう。音楽の伝道者・人種問題の解決者という鎧は着ているものの、彼は心の底では、自分をのけ者にした仲間を見返してやりたいと思っているのである。

このライダーが自分のことを「部外者」(outsider) だと言うことは、自分に課せられた役割りに反逆することである。スタッフが懇願し娘のゾフィーを助けてくれと言う時も、招待された先のカーヴィンスキー・ギャラリーの連中に対しても、ライダーは自分を部外者だと言い、自分と外部を遮断し問題が自分にふりかかってくるのを避けるからである。

部外者ライダーは、この都市の人達に引きずり回され、長い間家を空けるといふ家庭内の問題解決もできない。ライダーは優先順位を決めることができず、自分の役割を放棄してしまうのである。どうしていいか分からない窮地に

立つと、ライダーはその度にはるばる遠方から、ゾフィーに電話するのだった。ゾフィーは言う。

世界中から電話をかけてきて、同じことを言うの。いつだってこの段階にきたときに。あの連中がわたしにくっついてかかってくる、わたしの正体を暴きに来るって。【下 二二六頁】

しかし、その後ライダーは「ああ、うまくいったよ」とユダヤ人であるという正体を暴かれる恐怖などきれいさっぱり忘れてしまい、今までの騒ぎが何でもなかったようにゾフィーに言うが、彼の苦悩する姿を見ると病的なものを感じても不思議ではない。というのも、彼が健全な政治力学を行使するなら、家庭の問題もこの都市特有の問題にもそれなりの決着がつけられたと考えられるからなのである。

世界中を飛び回りハードスケジュールに縛り付けられている音楽家ライダーは、この都市でゾフィーの後を追いつ街の中で迷う暇などなく、ホテルに戻りジャーナリスト達の取材を受けるべきなのである。この都市の代表的なジャーナリズムとの会見をすっぱかしたため、こともあろうに地方紙の記者によって支配勢力の象徴であるサトラレ記念館の前で写真を撮られ、「雄叫びをあげるライダー」という見出しで新聞の一面を飾る羽目に陥ってしまう。

グスタフ（『日の名残り』の執事を連想させるが）によって、「集中力が無い」と言われてしまうライダーは元来いらだちやすい性格で、このいらだちを酒でまぎらわしていることが暗示される。自分がかって住んでいた人口湖のほとりの家の近所の住人が、あの人はいらだちの時は、「実にまともな人間だったが、酒をのむと変わってしまう」という。ライダーはこの事にあまり触れたくないために、ちらりとしか言及しない。ブロッキーが飲酒のために交通事故を起こし、コンサート会場に遅れてきて完全な演奏ができなかった時にも非難を一言も述べないのは、ライダー自身にも酒乱の性癖があるからなのだろう。

このライダーのいらだちは、閉所恐怖症を引き起こす。ライダーが到着したこの都市のホテルは、広々としたロビーの天井の一部が低くなっていて、閉所恐怖症になりそうな雰囲気を与える。人口湖のフィオナ・ロバーツのアパートでも、友人達から攻立てられて涙ぐむフィオナをどうすることもできずに、具合が悪くなり、居たたまれなくなったライダーは、通路に出ると気分がよくな

るのである。これなどはまさに閉所恐怖症の典型的症状であろう。

この閉所恐怖症に加えて、ライダーは厳しい状況に立たされると言葉を失ってしまうことが再三ある。怪しげな地方紙の記者によって、サトラレ館に連れて行かれた時も、この館の存在理由を聞こうとするが強風によって声がかき消され、記者達に相手にされない。また、人口潮のフィオナ・ロバーツの部屋で、インゲとトルデのうわさしている人物が自分であると名乗ることができず、フィオナに恥をかかせてしまう。後でふれる、伯爵夫人の晩餐会での滑稽なスピーチは、ミス・コリンズが止めなかったら果たして続けられたのであろうかという疑問がおこってくる。

このようなライダーが人間関係に翻弄され、ごみごみした都市を徘徊することは、自分の病を悪化させる行為に他ならない。やがて閉所恐怖症が過去の記憶を誘発し、肝心な場面になればなるほど過去の思い出したくない記憶にとらわれていき、現実から逃避し退行していくのである。

(三) 身体の廃墟としての道化

ギリシャ神話のヘルメス神は音楽の神でもあり、商業の神でもある多面的な神である。またヘルメスは、コメディア・デラルテの道化役アルレッキーノの元型と目されることもある。ユダヤ人であり現代音楽家であり、マジヤール人の女性と結婚したライダーは、このヘルメスとしての十分な特質をもっている。

浅田彰はヘルメスのメタリックな面に注目して、ヘルメスの現代的な役割について述べる。やんちゃで、お茶目で多面的なヘルメスによって、情念や身体から、つまり、意味の構造から音が軽やかに解き放され、メタリックな音楽が創造されるというのである。しかし、「甘い言葉で亀を誘惑し、子どものように残虐に一気に亀を引き裂き堅琴を作り、ユーモラスに歌いながらその堅琴を弾く」という快活な音楽の神ヘルメスと、この作品のライダーとは似ても似つかない。これは病のためにヘルメス特有の快活さがなくなり、道化的な姿しか見せなくなるからなのである。ライダーは病のために内部・外部の交換の役割をするヘルメスの特質を発揮できなくなるが、それについては後で触れることにしよう。

ライダーは、ホテルの近所にある映画館で会ったペダーセン議員のとりまきの一人に、「とんな使い」としてこの町に来ているといわれる。この言葉は

ライダーのこの都市での行動を予言しているといえる。このあと、さんざん人々に引っ張りまわされたあと、社交界での「抜き打ちプレゼント」として、正装もしないで伯爵夫人の晩餐会（翌日再びここに来て、カーヴィンスキー・ギャラリーであることがわかる）へ出向く。ちょうどブロッキーの死んだ犬のことで一座が騒然としていたが、ライダーの名が伝えられると一瞬水を打ったように静まりかえる。満をじてライダーは、ガウンの前がきちんと合っているのかを確かめて、椅子によじのほり、

カーテン・レールを壊し、ネズミに毒を盛り、楽譜にはミスプリント！【上 二二〇頁】

と言ってスピーチを始める。この様子があまりにも滑稽なので近寄ってきたミス・コリンズのために、スピーチは中断してしまう。このスピーチの断片化が象徴的であるのは、ライダーが、切れ切れな痕跡しかこの都市で残す事ができないからなのである。この短いスピーチは「ウィットに富んだスピーチ」として人々に歓迎されたが、このような厚遇は一時の事にすぎない。

ライダーは勝手気ままにさまざまな人と会い、当初予定してあったスケジュールをこなす事ができなくなる。唯一予定通りに進んだのは、カーヴィンスキー・ギャラリーでのレセプションだけかもしれない。しかも、ここでサトラレ記念館の前で雄叫びを上げる写真が、人々の矚感をかう結果となる。〈木曜の夕べ〉の主賓ライダーがコンサート・ホールで、危篤のグスタフの世話を掛け持ちしている時に周囲にいる男達がかみころした笑い声を上げるのは、道化になりさがつたライダーの滑稽な姿をあざ笑っているからなのである。

道化のライダーが現実には裏切られる様子は、劇的に提示される。幼なじみのライダーが来ないといって非難するインゲとトルデの前で、堪忍袋の緒を切らせたフィオナはいう。

「そこまで言うのなら」—今やフィオナは、ほとんど金切り声で叫んでいた—「あんたたちもこの事実を認めなさい！」彼女は舞台への登場を思いきり劇的に告げるかのように、わたしに向かって腕を振った。【上 三六〇頁】

しかし、今まで一言もしゃべらないライダーは、自分が話題になっている本人

であると言い出せず、こみあげてきた怒りといらだちのために、押し殺したうめき声しかあげることができない。その時、反対側の壁にかかっている鏡に写った「真っ赤に紅潮し、豚のようにしわくちゃ」な顔とわなわたと震える胸の前で握り締めた拳を見ると、ライダーはソファの端にへたりこんでしまう。その後もう一度名乗る努力をしてみようかとも思うが、先の鏡に写った自分の醜い姿が頭をよぎるとやめてしまう。ライダーは自分が他人にどのように写るかについて自意識が強すぎる。このためライダーは、他人の目に写る自分の姿を隠蔽するように語るのである。

〈木曜の夕べ〉ではさらに悲惨な状況になる。ブロッキーが倒れたあと、普段の水準で演奏することが自分の義務だと感じ、ライダーは演奏会を再開しようと思いカーテンを引く。しかし、

会場がいくらか混乱しているのは覚悟していたのだが、そのとき目にした光景に、わたしは呆然とした。聴衆の姿は一人も見えず、そればかりか座席もすっかり取り払われている。【下 三三六頁】

観客が去ってしまい誰もいない舞台の上で、道化師としてのヘルメスだけがまるでぬけがらのように立っているのである。自分が必要とされていないと信じたくないライダーは、このホールは多目的のために、座席が取り払われてしまったのだと考える。外はもう夜が明けたのだろう。天井のあちこちの長方形の部分から太陽が光の柱となって注いでいる。ライダーが直面した新しい世界は、ホフマン夫人のいう太陽とぬくもりに満ちた世界ではなく、観客の全くいない舞台の上で、ライダーを断罪し、不必要な存在であると宣告するのである。

ライダーの失敗の原因は自分の限界を理解しないことにあるが、すべてを無防備に受け入れてしまう道化役のライダーの無防備な弱さは神々しささえ感じられる。その神々しさは彼の芸術（ステファンに言った言葉を思い出そう）および自分自身の存在に向けられた真摯な言葉とともに私たちを魅了する。

ライダーは、この都市に住みついている道化的な人物パークハーストに向かって、下らない連中と我慢してつき合うくらいなら、「なぜライダーの成功にそんなに腹が立つんだ」といってやったらいいと言う。そうすれば、きみのなかにいる簡単に操られたり妥協したりしない、「道化の仮面の下にずっとずっ

と奥深い人間がいる」ことが証明されるだろうと言う。『漂う世界の画家』の小野益次の言葉や、ライダーがステファンを激励する言葉を見るとわかることは、言葉の意味の基盤が揺らいでいるために、発せられた言葉をどう信じたいのか目眩を感じることもあるのだ。ステファンへの激励の言葉、ライダーの言う「ずっとずっと奥深い人間」という言葉の前に、私たちはいわば宙吊りにされた真実の言葉に耳を傾け、しばし沈黙するのである。これはカズオ・イシグロの韜晦でない、もはやこのような形でしか神なき世界の真実の言葉は存在しないのである。

第二章 不機嫌な都市

(一) 静かなノイズ

人々に引きずり回され、練習時間のとれないライダーは、思いあまってホフマンに練習場を提供してほしいという。しかし、最初に教えてもらった部屋は気に入らず、新たにホテルから離れた小屋に行くことにする。ホフマンはライダーを車に乗せ、郊外の小屋に連れて行く。しかしその小屋に行く途中の道路はひどく停滞している。ホフマンはしきりに、この都市の交通事情を嘆く。

この都市の交通事情同様に、都市の人々の思考回路も停滞している。ペダーセン議員のいうようにマックス・サトラーがこの町の市民の想像力の中で「神話の域」に達しているのも、もはやクリストフにかわる誰か（たとえブロッカーだとしても）をもってきても、状況に何らかの変化をみられないようだ。都市住人たちはライダーをさんざん引きずり回すが、自分達の手でいっさい改善しようとしな。彼らは退廃と停滞感に浸りきっているのである。

このような状況から抜け出すことができるのだろうか。息苦しい〈木曜の夕べ〉の会場から旧市街に気分転換に来たホフマン夫人の言葉によって、この状態から脱することは非常な苦痛をとまなうことがわかる。彼女はいつ新しいものが始まっていいように心の準備をしていると言う。新しいものが始まる一瞬は、「ちょうど急にコードがぶつたりと切れて分厚いカーテンが床に落ち、まったく新しい世界、太陽とぬくもりに満ちた世界が現れるときのように」短い瞬間でも、正しいタイミングで現れてくれればいいのだという。

私たちはホフマンのエネルギッシュに活躍する姿をよく知っているために、

ホフマン夫人の隠された一面を知り驚きさえする。しかし、このように新しい世界の出現を望んでいるのは、ホフマン夫人ばかりではない。グスタフも、娘の幸せとポーター達の待遇改善が実現される世界の出現を待っている。ゾフィーも、ステファンも、ホフマンも、ミス・コリンズも、ペダーセン議員も、いや漠然とではあるが、音楽と芸術を愛する都市住人たちも、全く新しい世界の出現を待っているのである。しかし実際には、〈木曜の夕べ〉のように自分たちの前に新しい音楽が姿をあらわしても、古い価値観にひたりきってしまうために、新しい音楽を受け入れることが出来ないのである。市民の一人がいうように、この都市が「ただの冷たい近代都市」になってしまうのも、そう遠いことではないようだ。このような行き詰まった状態は、部外者ライダーが吐き捨てるようにいった「気味悪い怪物」の支配下にあると言えるだろう。

父と母がこの都市に来るという妄想にひたっていたライダー自身は、なぜ皆がそのこと教えてくれないのだろう、と不満をいう。この都市でライダーのスケジュールを管理しているミス・ヒルデはとうとう最後に、「町の者は、あなたがお考えになっているほどには、頻繁には話しません」と答える。しかし、この小説の最初から、ライダーに対するこの町の人達の会話は異様なくらい長いことに気づく。グスタフ、ホフマン、ステファン、市民互助グループのインゲ、人口湖の駐車場の門番、森の中で会ったジェフリー・ソンドラスやその他様々な人達の長々とした会話を思い出してみよう。グスタフが話すゾフィーのっていたテンの名前を、ステファンの話すホフマン夫人の芸術的嗜好や、彼の音楽の先生の名前をなぜ知る必要があるのか。彼らはライダーにありったけの情報を与えようと必死なのだ。これに比べると、ライダーの科白が断片的で短いのは、彼がこの都市の人々に翻弄され長々とした会話を聞かされ、神経症に苦しんでいる証拠になる。もっとも効果的なのは、人口湖の駐車場の門番が長々と自分のことを語り、一体ライダーはカーヴィンスキー・ギャラリーでのレセプションに間に合うのだろうかと思わせる場面であろう。このあと猛スピードで高速道路をとばし、晩餐会の会場に着くと人々の笑いものになるからである。

郊外の人口湖に行った時の、住人達の無気味な会話を思い出してみよう。みんな押し黙り、まるで唯一の関心事が死であるかのごとく語るではないか。都市の外部は、無機的で静謐な人口湖のように死臭が漂う世界なのである。いや都市の外部だけではなく。都市の内部においても、一向に解決しないことを長

々と話をするとは、都市住人達が自分達に迫った来る死を忘れようとする行為なのではないか。この都市の音楽的状况を変えるきっかけとなるミス・コリンズが、自分もブロッキーも年をとったと言ったり、〈木曜の夕べ〉のお祭り騒ぎを客観的に見ているホフマン夫人が、自分の老化現象を語ることは興味深い。なぜなら、最後には朽ち果てみんな沈黙してしまうからである。この都市に貧困が増大していることは悲惨だとミス・コリンズは心配するが、都市の貧困の陰では過去の重圧に押しつぶされ、長々と語ることで迫り来る死を忘れようとする人間達がいるのである。

〈木曜の夕べ〉の裏方にまわり尽力し、着実に現在の地位を手にしたホフマンは、芸術の才能がある夫人との分不相応の結婚し苦しんでいる。「くるぶしに鎖と金属球をつけられ、おまえという牢獄に閉じこめられている」という彼の言葉はその苦悩を余すところなく伝える。ホフマンばかりではない、長々と会話をする人々の中でも、グスタフ、ホフマン、ステファン、ペダーセンらは過去という自分の殻に閉じこめられているのである。固い殻は、グスタフにとってはゾフィーとの不仲であり、ペダーセンにとってはこの都市の音楽状況の覇権争いであり、ステファンにとっては両親の自分に対する評価である。ちょうどライダーが閉所恐怖症によって彼の現実把握が妨害されているように、これらの人々の過去の殻は、彼らの魂を抑圧し現実から疎外しているのである。

ソーラー・マンと叫んだり、ターザンのように雄叫びを上げるボリスは、人口湖のほとりを歩いている時に、狂ったようにつぶやく。何の音もしない、無味乾燥とした風景の人口湖のほとりをぶつぶつつぶやきながら早足で歩くボリスと、そのあと追うライダーの姿はグロテスクである。しかし、郊外ばかりでなく都市においても、ライダーは同様のつぶやきをホフマンから聞く。一度目は、この都市に到着したその日の真夜中近くに、伯爵夫人の晩餐会に連れて行かれる時に聞く。ライダーが乗った車を運転しているホフマンは、「ライダーさまはご旅行中でした。ライダーさまは・・・ご旅行中でした」と自分の世界に没頭してつぶやく。これは、支配人ホフマンが、〈木曜の夕べ〉にブロッキーを出演させるという大変な仕事と、不釣り合いな結婚の重圧のためにおこる、一種のノイローゼの兆候である。このホフマンの

「雄牛だ、雄牛、雄牛、雄牛！」【下 一三九頁】

という断片的なつぶやきはさらに不気味である。実は、伯爵夫人の晩餐会に行く途中にも、この不気味なつぶやきを聞いているが、そのときはさほど気にかげなかったのである。しかし、このつぶやきをまた聞いたライダーは、驚いて声の方へ顔をむけたが、声の主ホフマンは、自分の世界に浸ったままじっと正面を見ていた。周囲の農地を見回しても、どこにも雄牛などいない。ホフマンの雄牛という言葉が、「愚鈍な男」を示す言葉であるとわかるのは、〈木曜の夕べ〉が失敗に終わり自責の念にかられ、妻に自分のことを棄ててくれといった時にわかるのである。妻の芸術家としての天分をうらやんでいた人間が、自分のプロデュースした〈木曜の夕べ〉が失敗したのだからその落胆のほどは容易に想像がつく。しかし、ここで重要なことは、妄想の重圧に押しつぶされた都市住人の悲痛な狂気すれすれのつぶやきなのである。

ホフマンを代表とするこの都市の住人達の低いつぶやきは、狂気の様相を呈する都市の静かなノイズである。都市を支配する停滞の亀裂から、この静かなノイズが表層に姿を現すのである。ホフマンの「雄牛」のつぶやきに対して私が連想するのは、伯爵夫人の晩餐会でのライダーの悲鳴ともつかない、珍妙なスピーチである。どちらも、精神的重圧によって断片化させられた言葉なのである。

(二) ゆがんだ空間と都市の抜け道

ボリス、ホフマンらの無気味なつぶやきや、話し出すと相手のことも考えずに一気加勢に自分のことを話す人々の存在は、狂気すれすれの様相を呈している。そして、この狂気の様子を増長するかのように、キャラクター達の動作は極限まで切り詰められ、変形され、この小説の空間の位置関係はねじれるのである。

二度出てくるが、路面電車の中の一つの新聞を広げ、三人で見ている乗客達。カーヴィンスキー・ギャラリーから帰ってきて、アパートの部屋でくつろいでいる時に、絨毯の上に寝転がってあごが鎖骨につきそうなくらいに首をすくめているボリスの体の中から聞こえてくるロボットのような小さな音。ライダーの目の前で、ライダーを無視しゲームに夢中になり、三十秒も四十秒もさいころを振り続けているゾフィー。森の中で見た金属のオブジェのような無残にひん曲がったパイプの真ん中にあるブロッキー。あるいは、コンサート・ホールの小さな押し入れの中によじのぼる順番を待っている調理人達。動作が

誇張され狂気すれすれにまで拡張された人物たちの、超現実的描写に私たちは圧倒されるのである。

これに加えて空間もゆるやかにカーヴして先が見えず、無限に続いているかのような不安感を与える。ゆるやかにカーヴしていた半円形になっているカーヴィンスキー・ギャラリーの会場。旧市街で迷いようやくのことでたどり着いたコンサート・ホールのゆるやかにカーヴし、広くがらんとした廊下。これらは、この空間に放り出されたライダーの悲劇的な運命を象徴している。

いま述べたのは平面的な無限の感覚であるが、垂直方向にもこの感覚はグロテスクに拡張されている。店舗の上にさらに四階分のアパートがのっているところに住んでいるゾフィー。新聞記者達と登った丘から下を見ると、「めまいを感じるほど」ずっと下まで続いている階段、「いくらほっとも次から次に現れて永久に続くように」思われる人造湖のフィオナ・ロバーツのアパートの階段のように、垂直方向の無限の感覚がライダーに襲いかかり、恐怖心を与え、彼の孤独な闘いをより一層明らかにしているのである。この狂気の空間はちょうど東欧の作家であるカフカの世界を連想させる、悪夢の世界なのである。⁶⁾

夫同様、不幸な結婚の重圧に耐えているホフマン夫人が、心理的に開放されることを目的としてさ迷う旧市街の役割は、昼の都市に対する夜の都市としての機能をもっているかのような印象を与えるが、この昼の都市・夜の都市という都市の深層の対立を無化してしまうかのように、この都市には秘密の抜け道が存在するのである。

伯爵夫人の晩餐会でのライダーの突飛な演説のあと、ライダーは激しい疲労感に襲われる。すると、ステファンが「歩いてお部屋までお送りしましょう」と言う。

わたしは一瞬、まだその言葉の意味がよく呑みこめなかったが、おおぜいの立った客や座った客、ウェイターやテーブルの向こうの、広い空間が闇の中に消えているあたりに目を向けたとき、突然ここがあのホテルのアントリウムだったことに気がついた。【上 二二四頁】

ライダーはこの館の反対側から入ってきたのでわからなかったと言うが、明らかに空間はねじれ、速い場所が抜け道で通じ合っているのである。同様の空間

のねじれはいたるところに見出せる。

丘の上のサトラレ館で出会ったクリストフに連れられてやってきた、長距離運転の運転手用のカフェーと、「ボリスを残してきたカフェーが同じ建物の中にあり、ここは二つの対照的な店—それぞれに別の通りから出入りし、別の客層を相手にしている—が入っている店舗の一つだということを思い出した」とライダーは語る。一体、ホテルから路面電車に乗っていった山の麓にあるこのカフェーと、ホテルの脇のカフェーが反対側にあるものなのだろうか。このような空間のねじれを解消してしまう不合理な感覚（「気がついた」、「思い出した」）の原因は病的なもの（ライダーが閉所恐怖症であることは前に指摘した）によるのだろうか。しかし、読者は、先にみたアンリアルな人達の集合体の都市が、ありそうもない抜け道をもっているも何の不思議はないような感覚に陥るのである。カフカの狂気すれすれの非現実的な世界だからこそ、このような非合理的な感覚が逆にリアルな感覚を与えるのである。

それを裏付けるように、非現実的な都市の抜け道は、ばかばかしいほどリアルに詳細に記されている。クリストフと入ったカフェーの店主のあごひげの男に促されて行くと、抜け道がある。ドアは異常に背が高く、あまりに狭いので横向きにならなければ通れそうにない。さらに進んで行くと階段があるので、一歩ずつ段をのぼる。するとやがて光が見えてくる。

最後の段に来たとき、目の前に小さな長方形の光が見えた。二歩前に進むと、私はその真ん中に立ち、ガラス窓が太陽の光にあふれたカフェをのぞいていた。テーブルや椅子が見え、たしかにここはボリスを残してきたカフェだと思った。【上 三〇六頁】

あごひげの男が暗い床にしゃがみこんで鍵を入れると、目の前の仕切りが開き、ライダーはボリスの待っているカフェーの中に入ってしまう。このカフェーの幻想的な通路は、妙にリアルな感覚を与えるのである。

カーヴィンスキー・ギャラリーでも、ライダーは苦心して探した抜け道に入り、ホテルの談話室やロビーに続く長く暗い廊下を通る。（ここで、スーツ・ケースを運ぶ獣のようなグスタフに出会う。）ちょうどあごひげの男が利用した扉のように、ここの通路の扉も小さく、ゾフィーがようやくのことで見つけなければ、ただの収納庫の扉としか思われなかったであろう。このように、ス

テファン、あごひげの男ばかりではなく、ライダーも、ボリスも、ゾフィーも、グスタフも都市の中の秘密の抜け穴を利用しているのである。

さきに道化としてのライダーの存在が劇的に示される場面をあげたが、これと同様に都市の抜け道を探すライダーの姿も限りなく道化に近い。カーヴィンスキー・ギャラリーから帰ろうとして抜け道を探すときに、ライダーは、目立って退場しようとするが必ず失敗する主人公の登場する映画の場面を思い出す。目の前の三つの扉のうち、真珠の象眼細工がほどこされ、両側に石柱が立っている

ドアを引き開けた、そのとたん、ぞっとしたことに、わたしが一番恐れていた事態が起きた。わたしが開けたのは、掃除道具の倉庫だったのだ。【上 四一八頁】

掃除道具箱はいっぱい詰り込んであったので、モップ、バケツ、油布が四方八方に散ってしまう。道化としてのライダーが、ここでは、カフカ的なブラック・ユーモアをかもし出し、その滑稽さが誇張されているのである。

カズオ・イシグロの日本を舞台にした小説は、小津安二郎の映画のタッチが認められるが、いま述べたような『充たされざる者達』の都市の抜け道を利用し空間を移動するときの、ライダーのスラプスティックな光景は、チャップリン、マルクス兄弟（旧市街のグスタフ達の集まるハンガリアン・カフェの主人はグルーチョ・マルクスに似ている）をはじめとするどたばた喜劇の映像そのものであるとっていい。カズオ・イシグロは異国情緒と静かなリアリズムの小津の世界から、⁽⁷⁾さらに一歩進んで狂気と錯乱と幻想と多人種的な世界へ踏み出したと言えるだろう。

第三章 病んだ記憶と不機嫌な都市

(一) 記憶と現実のモザイク模様

路面電車の中で、フィオナ・ロバーツになぜ来てくれなかったのかとせめられた時に、ライダーはこの都市に来て困り果てる両親の姿を想像する。このことからわかることは、ライダーが夢想的な性格であるということである。夢想的な彼が人間関係を翻弄され続けると、過去の記憶に襲われ、現実と過去の記

憶の境目がなくなってしまうのである。この病的な精神状況は、小説のはじめにホテルの部屋に入ると、イングランドのおばの部屋の記憶に浸りきってしまうことで、すでに予告されていたが、ユダヤ人としての暗い記憶に加え、過去の記憶がこの小説の随所に顔をみせる。

ステファンと話しをしている最中に、飛行機の中でサッカーのワールドカップについて隣の席の男から質問されたことを思い出したり、路面電車の車掌のフィオナ・ロバーツと出会ったことで、彼は九才の頃にいたウースターシャーの村の彼女の家を思いだす。また人口湖の昔の住んでいた家の部屋は、昔「両親と一緒に数ヶ月住んでいたマンチェスターの家の居間の後部そっくりなのだ」と思い当たる。人口湖からカーヴィンスキー・ギャラリーへ行く途中に、何年か前のワールドカップの二次リーグのプレーを思い出す。この記憶と現在とモザイク模様は頻繁に現れ、読者に目眩を起こさせるのである。

ライダーはコンサート・ホールに行く途中で、「わたしはこの長い年月をへて、ようやくこれからもう一度、両親の前で演奏しようとしている」のだから、自分の目的を最優先し、それ以外の面倒なことに関りにならないようにしようと決心する。ライダーはステファンと同様に、両親に認めてもらいたいという強迫観念にとり憑かれている。自分の出番が近くなり、不安が高まってくると、森の中ですれ違った馬車に自分の両親が乗っていて、いまこの瞬間にもコンサート・ホールに両親が到着したのではないかと錯覚したり、森の中で車に轢かれたプロッキーを見たときに、「ほんやりと自分がこの残骸の原因なのではないか、知らないうちに事故を起こしてしまったのではないか」という考えがライダーの心をよぎる。過去と現実の交錯に苦しむライダーは、ここまでくると、事実を確認もしない思い込みと因果関係を全く無視した妄想に憑つかれてしまうのである。ライダーの妄想が彼の現実になってしまっているのである。

(二) 越境する自己言及

自分の唯一心にとめていた両親がこの都市に来ることや、幼なじみのフィオナのところに行くことと約束していたことが「じつにおぼろげな記憶」でしかなかった理由は、自分の内面を見つめることを放棄し、他人の記憶にまで入り込み避難所を求めようとしているからなのである。

都市の空間の境がなくなり人々が行き来するリアルであってリアルでない、

想像力の境界線上に存在する都市において、病んだヘルメスは、閉所恐怖症、家庭の不和、(ホフマン夫人に会った時に話題にした) 老化に苦しみ、ついには過去の記憶に苦しめられ、心地好い場所を求めて自己と他者との二領域間の境界を越境するようになる。

ここで、さき述べた浅田のプリリアントなヘルメス像についても一度触れよう。ライダーと関連して重要だと思うのは、〈交通〉の神としてのヘルメスである。〈交通〉とは、秩序と混沌、中心と周縁といった双体を媒介する運動ではなく、「どこでもないにもかかわらず、いたるところに通じている、不可思議な隙間」を跳躍し、飛翔する〈交通〉である。「音楽は砂だと言った。その砂とは、実は水銀の粒ではなかったのか」という浅田は交通のヘルメスの具現化として水銀をイメージする。

液体でありながら、メタリックな物質。といて、カッチリした鉄骨構造でもなく、コスモロジカルな照応によって同心円的な調和をかなでる鉱物の結晶でもない、震えながらギリギリのところで表面張力で耐えていたかと思うと一気にあざやかな軌跡をえがいて走り去る水銀。【『ヘルメスの音楽』四二頁】

しかし、このように異なった領域を水銀のようにすばやく、音もなく駆け巡る交通の神でもあるヘルメスを、ユダヤ人であり、マジヤール人の娘と結婚し、旧弊な音楽と訣別した現代音楽のホープであるライダーにあてはめることができるであろうか。ヘルメスは異領域の間を駆け巡り快楽を求めるはずであるが、ライダーは精神的な病のために自分の目的を果たすことができない。彼が異領域間を駆け巡るヘルメスの片鱗をみせたのは、ステファンとブロッキーの音楽を評価した時だけである。この小説では、病をわずらったヘルメスであるライダーが、〈交通〉の神ヘルメスの特質を示しながらもヘルメスになりきれない過程が残酷なほど鮮やかに示されるのである。

ライダーが、他人の身体の中に入り込み他人の目で見えたかのように語ることは、この小説のかなり最初で示されている。ステファンに車でひろってもらい、郊外の小さな村から帰ってくる途中、ステファンはミス・コリンズのアパートの前に車を止め、彼女のアパートに入っていく。ライダーの視線はステファンのあとを追い、このあとあたかも自分がその場にいるかのように、二人が住居の中に入っていくところを記し、〈木曜の夕べ〉のために、アル中のプロ

ッキーを回復させようと、ホフマンがなみなみならぬ尽力をしていること、ミス・コリンズにも協力してほしいことが話し合われていると伝える。またこの帰りに、曲の練習をするので見てほしいといった時に、曖昧な返事をしたライダーはステファンが怒っているのではないかと顔を見て、「彼が数年前の出来事を思い出していることに気がついた」と言う。数年前の出来事とは、ミュラーリーの曲を母の誕生日に演奏したが、母は気嫌を悪くしてしまったことをさしているのである。しかし、どうしてこのようなことをライダーが知っているのだろうか。ライダーは全能の話者のように、他者の内面に入り込み語っているのである。この点では、ヘルメスの才能がいかされているのである。

この小説はライダーが語るという形式をとっているので、このような書き方になるのだろうか。しかし、ホフマンがライダーが自分の妻に対する対応に不満をいう時に、ホテルの中やロビーをぶらぶら歩きまわったり、コーヒーを飲んでいるライダーが存在したことを知ると、ライダーの疲れて時間がないという言葉は疑わしくなってくる。ライダーは編集して語っているのであり、その編集が不完全なため、私たちは語られる人間の外側にいるのか、内側にいるのか区別がはっきりしなくなるのである。

不完全な語り手のライダーの編集作業のほころびから、私たちの知らない、つまり語られていないライダーの存在が姿を現すことがある。

サトラー記念館へ行くことに同意したライダーは、ホテルの中庭で記者達が自分の悪口を言っているのを聞いてしまう。そして、地方紙の記者とカメラマンが山頂で撮影したときにも、

「やっこさんを納得させたらしいな、と言ったんだ。きっと注文どおりやってくれるさ。」「どうだかね」と記者は叫び返した。「これまでのところは協力的だったが、あの手合いはなかなか気が許せん。だからお世辞を言いつづけるよ。こんなに高いところまで上ってきたのに、大満足のご様子だ。しかし改めて考えれば、あのばかは建物がどんな意味を持つかなど知りもせんだろう。」【上 二七〇頁】

という記者とカメラマンとの会話を聞く。ライダーは自分がいることも知らずに話しをしているこの言葉を聞き、そのまま記しているのである。これと似たような例は、人口湖でフィオナのアパートで他の仲間の女性達に責められたと

きに、名のり出られなかった時にも見ることができる。この状況は精神的錯乱が昂じたライダーの退行例であると言ってこと足れりとするつもりはない。重要な事は、ミス・コリンズのアパートの描写でも明らかなように、ライダーが他者の内側に入り込んでしまい、〈交通〉をするヘルメスが病によって他人の内部だけに侵入しているということなのである。内と外の介在者であるヘルメスが、その能力を発揮できなくなると、今みたような記者達の肉体を借りた自己言及が起こるのである。

この他人の肉体を借りた自己言及は、さらに自己正当化にまで高められていく。人口湖で、ライダーはボリスに自分の置かれている状況を話す。すると、ボリスはいきなり「おとなしく立ち去れ。おまえたちみんなだ」と厳しい口調でつぶやきはじめる。ライダーはボリスが「空想劇」(senario)をやっているのだと気がつく。そして、ライダーはボリスの空想劇を語り出すのである。それは、ボリスが祖父のグスタフと組み町のごろつきからライダー、ゾフィーを守るというものである。空想劇の中のボリスはいう。

(…) ぼくはこっちの事情を分かってほしいんだ。こんなふうにならぬアパートを襲われて、ママはいつも泣いてばかりさ。いつも神経を張りつめて、いらいらして、だから何の理由もないのにぼくを叱りつける。それにおまえらのせいでパパも長い間家をあけて、ときには外国へも出かけなけりゃならないから、それでママは不機嫌なんだよ。それもこれもみんなおまえらがアパートを襲うからだぞ。こんなことをするのは、向こう見ずだからか、崩壊家庭に育てて分別がないからだろう。【上 三三一頁】

ライダーが家庭にいない理由は、ボリスにこの直前に語っているが、町のごろつきが原因となっている悪い状況なら直すことが可能であると言いたげである。ライダーはこのあとボリスがキムおばさんを発見し現実に引き戻されるまで、ボリスの空想劇を語って行くのである。ここで大切なことは、ライダーがボリスの空想劇に入り込み、ライダー家の家庭崩壊の原因を他の要因に転嫁し、ボリスという他者の肉体をもちいた自己正当化を行っているということなのである。

(三) 東の間の避難場所

他人の肉体の中に入り込むライダーは、まるで故郷のように自分の過去を思い出し、その記憶の柔らかな襖の中に退行し、避難場所として利用することもある。最も印象的な退行は、カーヴィンスキー・ギャラリーの庭で見た廃車に乗り込んでしまう下りである。ここで過去の記憶に浸り切ったライダーの姿が、現実にはどう写るのが鮮やかに示されている。ライダーが置き去りにされていた廃車に近づくと、この車は「かつて父が何年も乗っていたわが家の愛車の残骸」だとわかった、と断言する。この車をじっと眺めるライダーを、ポリスとゾフィーは軽蔑するように眺めている。その視線に気がつき、ライダーはその廃車を蹴ってみせる。二人が立ち去った後ライダーは、父の大切な車にぞんざいな扱いをしたことに自責の念を感じ、座席に身をねじ込もうとする。

なかに入ると、座席の一方の端が車の床を突き抜けて落ち込んでいて、体が不自然に低く沈みこんだ。頭にいちばん近い窓から、草の葉とピンクに染まった夕空が見えた。座り直してドアを引き寄せ、もう一度それをほぼ完全に閉めてから—何かにつかえてぴったりと閉まらなかった—しばらくすると、私はかなり快適な姿勢で座っていた。

まもなく深い安堵感に満たされてきて、わたしはしばし目を閉じた。そうしていると、この車で一家そろって遠出した楽しい思い出ばかりがよみがえってきた。わたしのために中古の自転車を探そうとしたあの田舎を走り回ったときのことだった。【上 三九五頁】

カーヴィンスキー・ギャラリーの庭の廃車の内部は、閉所恐怖症であるライダーにとってさえ、一時的にでも彼の心理的苦痛を忘れさせてくれる、心地好い避難場所なのである。ゾフィーを、「何とせまい世界にいるのだ」と罵倒したライダーが、このさびだらけのぼろ車に避難所を求めたのは何とも皮肉である。しかし、この廃車は東の間の避難場所にすぎない。このすぐあとと苦痛を与える過去がよみがえってくるのである。

彼は、古めかしい車の中でさえも両親がそのうちにぼろを出さないかと、たえず緊張感の中にいたというのである。ライダーのために、中古自転車を探しに田舎へいった時に、通された応接室で仲睦まじい夫婦としてうつっている両親が、そのうちのボロを出し迎えてくれている人達に実情が分かり、「この目

の前で急に恐怖で凍りつく」瞬間をおそれているのである。このように常に正体が暴かれるという恐怖をもっているライダーには、甘美な追憶は苦く生々しい爪痕と紙一重のところで成立しているのである。

唯一の避難場所であった廃車の中で、このように苦い回想に陥るのは、ライダーには、もはや避難場所など存在しないことを暗示しているのである。ライダーは旧市街にあるハンガリアン・カフェでポーター達と楽しい時を過ごすが、疲労困憊し眠ってしまう。ポーター達のたまり場も避難所とならず、浅い眠りがさめればまた苦闘が続くのである。

(四) 不機嫌な壁

ライダーは郊外の коттеージでも満足に練習することができないままに、ホフマンの車でコンサート・ホールへ向かう。途中、車は一方通行とこの都市特有の渋滞のために、なかなか進まない。ライダーは車から降り、コンサート会場まで歩いていくことにする。コンサート・ホールの屋根が、見えなくなりライダーは不安になるが、角を曲がるとコンサート・ホールが目の前にあらわれる。ライダーは、父と母にステージに立っている姿を見てもらえる思うとわくわくする。しかし、よろこんだのも束の間、

私の歩いている通りの少し先で、煉瓦の壁がこの道路をふさぐように一実のところ、道幅いっぱいに一そびえ立っていたのだった。最初は壁の向こうに鉄道の路線が通っているのかと思ったが、そのあと、道路の両側にもっと背の高い建物がとぎれることなく速くまで続いているのに気がついた。【下 一四五頁】

ライダーの前に立ちはだかったこの壁は、有名な観光名物であり、一九世紀にある風変わりな人物がつくったものだど都市の住人は言う。

この壁（ベルリンの壁を暗示しているともおもえる）はライダーばかりでなく、この小説の幻想的な都市像を知っている読者を面食らわせる。ライダーはこの壁はまさしくこの町の象徴であると言ったあと、

あちらにもこちらにも、全くもってばかげた障害ばかり。そのうえあなたがたは何をしています？みんな厄介だと思っていますか？いますぐ取り壊して、市民が自分の仕事に専念できるようにしろと、要求していますか？いやいや、一

世紀近くも、そのままずっと我慢してきたんだ。絵葉書までつくって、魅力的だと思っている。この煉瓦の壁が魅力的だって？【下 一四六頁】

と言う。たしかにこの都市の不合理な壁の存在は、ライダーには停滞感の象徴であろう。しかし、グスタフを中心とするマジヤール人達が旧市街で楽しむ姿を見れば、この壁は都市を新しいものと古いものとに二分割し、都市に暮らす人々が共存していけるトポスをつくりだしているということがわかる。異なった空間が抜け道によってつながっている都市において、この壁があるために旧市街は都市住人に安らぎを与える場所になっているのである。ホフマン夫人でさえもが、コンサート会場という苦しみ場所から逃れるためにこの旧市街に息抜きに来ているのである。

しかし、この壁は崩壊したベルリンの壁とは違い穴一つあいていない。壁の前で越境者ライダーは、いらだっているのである。つまりこの壁はライダーの言った「気味悪い怪物」のように都市の中心部の一番深いところに存在し、越境するものの行く手をはばんでいるのである。この後ライダーは、この旧市街のありがたさを知っているホフマン夫人によって、コンサート・ホールに案内される。この壁は、抜け道を利用する都市住人達を苦々しく思っている不機嫌な存在なのである。

この不機嫌な壁について私が連想するのは、「二〇〇一年宇宙の旅」のモノリスである。この映画では、人間は猿人の頃にモノリスによって授けられた知恵＝技術を発展させ、月にもモノリスがあることを確認し、木星にまでモノリスを求めて探査機をとばす。しかし、人間が造り出したコンピュータのハル九〇〇〇は人間の知恵を授けたものの正体を知ること自身、その存在を冒瀆することに等しいと判断し、木星への探索を失敗に終わらせてしまう。ライダーが映画館で見た場面（その場面は終わりまでみることはできなかったが、）は、このハル九〇〇〇が自分の意志で木星行きを中止したのではないかと疑いを持った宇宙飛行士達が相談する場面であった。都市住人達の姑息な知恵をあざ笑うようなこの壁から、その存在を知ることをかたくなに拒否するモノリスを連想してもなんら不思議はない。

ライダーがののしったように、絵葉書までつくり、美化してきた馬鹿げた象徴であるこの都市の不機嫌な壁は、〈木曜の夕べ〉のあとの記者会見で、フォン・ヴィンターシュタイン市長が保存すると発表した。つまり何も変わらない

ままた、この都市はやがて何のとりえもないただの、「冷たい近代都市」として生き延び、老体をさらすのであろう。しかし、この小説の終わり近くでわかることだが、停滞感が充満しているこの都市にも、中流・上流階級の人達とは全く別のところで、生き生きと生活している労働者達が存在しているのである。権力抗争と支配構造が二重化している都市が、このような二重の都市になっていても何の不思議もない。壁は旧市街と新しい市街をはっきりと分け、都市の矛盾、不合理さを包みこんでいるのである。

まとめ

都市の廃墟とは何かを問題にしている点では、『充たされざる者達』の不可思議な都市像は、『漂う世界の画家』の都市像の延長上にある。しかし、都市の廃墟化のベクトルは全く正反対である。『漂う世界の画家』では夜の廃墟の世界は来るべき昼の世界で終わり、語り手小野益次は終戦後の日本の廃墟の中で、自分の幻想である廃墟から抜け出そうとしている。一方、『充たされざる者達』では、ライダーの視点で伝えられていた都市像は歪み、ねじれが加わり、現実なのか幻想なのかははっきりせず、『漂う世界の画家』のフラットな日本画のような感覚と比較すると、さらに曖昧で複雑な世界を提示している。

〈木曜の夕べ〉の失敗の後、平静な姿をみせた都市を見てライダーは、よそ者に指図されずに「平静さをとり戻すことができるならそれにこしたことはない」とさばさばとした様子でいう。幻想的な都市がライダーの覚醒によって無と化してしまい、平穏なありきたりの都市が姿を現すのである。読者がライダーとともに経験した幻想的な都市は宙吊りにされるのである。しかし、果てしない倦怠感にみちあふれた狂気の都市は、実は都市の真の姿なのかもしれないのである。読者の経験した幻想的な都市は、ちょうどライダーの真摯な言葉が真実か否かの境界線上に存在しているように、現実・非現実の境界線上に存在しているのである。

〈注〉

(1) 浅田彰、『ヘルメスの音楽：(一九八五年、一九九二年 筑摩書房 四五頁)

(2) テキストは、kazuo Ishiguro, *The Unconsoled* (London: Faber, 1995) を用いた。

The Unconsoled は「充たされざる者達」と訳すべきである。というのも、充たさ

れないのはライダーのみならず、不機嫌な都市の都市住人たちでもあるからなのだ。

本作品の翻訳は『充たされざる者』(上・下)(古賀林幸訳 中央公論社 一九九七年刊)に従い、引用ページ数は【 】内に示すことにする。ただし、本書の日本語訳の題名は上記の理由で、『充たされざる者達』として言及する。

- (3) 古川淳一、『『かなり名誉ある敗北』の墮天使』(国学院大学紀要 第三五巻)参照。このなかで私は、ジョナサン・ラバンのいう「柔らかい都市」の概念を拡張し、都市について論じている。
- (4) 『漂う世界の画家』とは *An Artist of the Floating World* (London: Faber, 1986) のことをさしている。邦訳題名『浮世の画家』をすてこの題名にしたことについては、拙著『廃墟の語り方』(法政大学教養部「紀要」第一〇三号)を参照。
- (5) スタンリー・キューブリック監督、一九六八年作成
- (6) 『充たされざる者』解説参照。古賀林はライダーが「カフカの悪夢の世界に迷いこむ」(下 三六五頁)と指摘している。またこの都市の壁について直接言及していないが、ベルリンの壁の崩壊後のイデオロギーの相対化についてもふれている。
- (7) 例えば、『漂う世界の画家』のなかの、小野益次が弟子の黒田と久しぶりで雨の中で再会する時の描写を見よ。